

〔第24回 学術集会シンポジウムII〕

シンポジウム 地域で家族を支える

千葉大学大学院看護学研究科

千葉大学医学部附属病院

(座長) 辻村真由子

瀬尾 智美

1. 趣旨

日本家族看護学会第24回学術集会の大会テーマである「地域包括ケアの時代に家族看護に期待される実践」に沿い、本シンポジウムは「地域で家族を支える」と題し、医療・福祉・行政の立場から、様々なライフサイクル、健康段階にある家族を地域で支える実践や仕組みづくりの現状を知り、討議する機会とすることを意図して企画した。

2. シンポジストからの報告

1) 患者を支える，家族を支える，地域を支える

ただメンタルクリニック院長の武田直己医師から、周産期に発症する産褥精神病、産後うつ病を含めた家族支援の活動について、事例を交えて報告された。クリニックの位置する松戸市を中心とした千葉県東葛北部医療圏は精神科医療の資源が限られているが、その中で、コンサルテーション・リエゾン機能を担うことを理念とした、個別の患者への丁寧なかかわりや地域を視野に入れた多職種連携の活動について報告された。

2) 妊娠期から子育て期にわたる家族への切れ目のない支援の実現に向けた行政の役割

松戸市総合政策部兼子ども部兼教育委員会学校教育部の胡内敦司審議監から、改正児童福祉法等の解説、千葉県松戸市での実践が報告された。地域包括ケアの実現に向けて、地域住民や地域の多様な主体が「我が事」として参画し、人、資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながることの重要性が強調された。

3) 認知症の人と家族の地域での暮らしを支える認知症対応型通所介護の実践

千葉県四街道市のデイサービス和良比なごみの家所長で認知症看護認定看護師の西ケイ子氏より、認知症の人当事者の視点を大切にすること、認知症の

人の家族を多面的・流動的に捉えることの重要性が示された。認知症治療薬の開発やサービスの充実の一方で、家族の孤立があることが指摘され、「地域の無名の見守りボランティア」の育成につながる認知症カフェの活動についても紹介された。

4) 生活者としての家族を支える訪問看護師のかかわり

千葉市稲毛区の緑が丘訪問看護ステーション所長の山崎潤子氏より、病院での家族の様子と自宅での家族の様子の対比を交え、訪問看護師が行う家族支援について、具体例を挙げながら報告された。家族を単なる介護の担い手として捉えるのではなく、生活者として捉え、療養者と家族が安定した関係を保ちながら暮らしていけるように支援する視点の必要性が指摘された。また、認知症初期集中支援チームの活動についても話があり、認知症を発症することで危機が生じている家族へのファーストタッチとなる活動であることが紹介された。

3. 討議

一つの病院という組織の中でも異文化を感じることもあるが、地域ではさらにかかわる機関が多方面になることによる、連携や情報共有の重要性と困難性について、フロアとの意見交換が行われた。

4. 総括

認知症初期集中支援チームの活動紹介から家族を支える地域でのネットワーク構築に向けて積極的な介入が始まっていること、地域で家族を支えるためには一つの分野の支援ではまかないきれない現状から、支援を後押しする制度の充実が求められることなどが確認できた。妊娠期から看取り期までのライフサイクルにわたり、家族の孤立を防ぐ地域包括ケアシステムが構築されつつあることを実感できるシンポジウムとなった。